

18歳の1票

今月の
テーマ

待機児童



これまで待機児童問題の現状や背景をみてきた。待機児童がなかなか減らない中で、どうすれば働きやすくなるのか、どうすれば安心して子どもを育てられるのか。働き方や育児の専門家に意見を聞いて考えてみよう。

安心して子ども育てる

多様な預け方を

大日向雅美さん(65) (恵泉女学園大学長=発達心理学)
待機児童問題では保育所ばかりに目が行きがちだ。働き方やライフスタイルが多様化している。少人数の小規模保育や家庭的保育など、多様な預け方のある地域作りが必要

だ。子どもはかつて、親だけでなく、地域に見守られながら育った。地域の間関係が希薄化した今、子育て家庭は孤立しやすい。多様な保育の場で地域の人が活躍できるように、「子育て支援員」として養成する研修が始まっている。地域の子育て支援拠点などで、専業主婦が子どもを一時的に預けられるサービスの充実も大切だ。

普光院亜紀さん(59) (保育園を考える親の会代表)

国は、保育所のための財源をしっかりと確保し、整備してほしい。保育士の配置基準や定員の緩和によって、預かる子どもを増やそうとしているが、その場しのぎはやめるべきだ。保育の質を落とし、保育士の負担が増し、保育士の離職を招く。働く女性にとっては、出産しても子どもが保育所に入らず、仕事に復帰できないという状況は恐怖

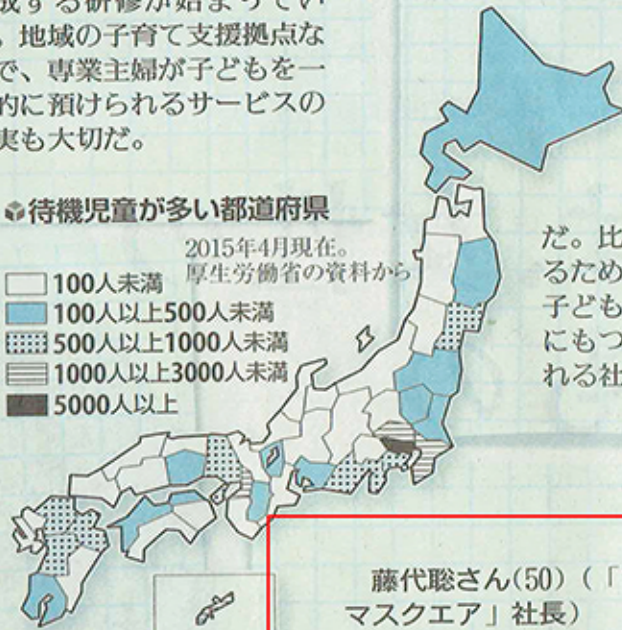
保育所整備の財源

だ。比較的入りやすい0歳のうちに預けるため、無理して育児休業を短縮したり、子どもを産むのをためらったりすることにもつながってしまう。安心して預けられる社会にしてほしい。

◆待機児童が多い都道府県

2015年4月現在。
厚生労働省の資料から

- 100人未満
- 100人以上500人未満
- ▨ 500人以上1000人未満
- ▩ 1000人以上3000人未満
- 5000人以上



塚越学さん(40) (NPO法人「ファザーリング・ジャパン」理事)

保育所をこれ以上のペースで作るのは難しい。今進めてほしい対策は、男性が育児休業を取りやすくすることだ。0歳を預かる保育所の負担や、母親に偏りがちな育児の負担も減る。現状で男性の育休取得率が低いのは、長時間労働や職場の理解不足で、仕事を休めない状況に置かれているからだ。男性が育休をとり、育児もできるよう、国や企業が主導し、働き方を変えていくべきだ。男性と女性がともに休みやすくなれば、子どもと過ごす時間が長くなり、より良い子育てにつながる。

男性も育休取る

藤代聡さん(50) (「マスキエア」社長)

保育士らが常駐する託児スペースがあって親が子どものそばで働ける「託児スペース付きオフィス」を運営している。フルタイムの労働者が優先される保育所を整備する政策は、母親の希望をカバーしきれていない。週3、4日ほど、自宅に近い勤務地に

職住接近を支援

子連れで出勤し、短時間でも子どものそばで仕事をしたいという女性は多い。保育所の整備に限界がある中で、企業も親も「保育所がないと働き続けられない」という思考ではなく、託児付きオフィスのような「職住接近」という働き方の支援も重要だ。

Check!

- ・自分の意見には根拠となるデータはあるだろうか
- ・ほかの人の意見を取り入れるとよい提案にならないだろうか
- ・施策にはお金がかかる場合も。どう確保するかも考えよう



* 8月のテーマは「先端医療」、7月30日は、オーストラリアの政治教育を紹介する予定です。